学 術 調 査 報 告 書

2008 年　　3 月　　10 日

（フリガナ）	コクボ　マリエ	入学年度	2005 年度
申請者名	小久保　真理江	学年	3

研究題目	チェーザレ・パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学の影響
主任指導教員	和田　忠彦

(1) 学術調査の目的

今回の学術調査の目的は、20 世紀前半のイタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼ（Cesare Pavese）に関する資料を収集することである。私は現在パヴェーゼとアメリカ文学の関係について博士論文を準備している。詩人・小説家としてだけではなく翻訳家としてもその名を知られるパヴェーゼは 1930 年代から多くのアメリカの小説を翻訳した。パヴェーゼとアメリカ文学との関係、とりわけアメリカ文学の翻訳という経験がパヴェーゼの創作活動に与えた影響についての研究を進めるために必要な文献を収集するのが今回の学術調査の具体的な目的である。

(2) 調査実施地および期間

ミラノ（ブライデンセ国立図書館）: 2 月 13 日～2 月 14 日（二日間）

サント・ステファノ・ベルボ（パヴェーゼ生家博物館）: 2 月 15 日～19 日（四日間）

トリノ（トリノ大学図書館）: 2 月 20 日（一日）

ヴェネチア（クエリーニ・スタンパリア図書館）: 2 月 21 日～24 日（四日間）

(3) 学術調査の具体的な実施内容（詳細に記入すること）

イタリアの図書館や博物館などに行き、パヴェーゼに関する資料を収集した。具体的には、パヴェーゼについての学術論文や、パヴェーゼを特集した雑誌、パヴェーゼによってイタリア語に翻訳された小説などの資料を収集した。

まずはミラノにあるブライデンセ国立図書館に行き、パヴェーゼが 1931 年に翻訳したシ

ンクレア・ルイスの小説『Il nostro Signor Wrenn（原題は Our Mr.Wrenn）』を閲覧した。このイタリア語訳は現在では絶版になっており、非常に入手が困難な文献である。1931 年という出版年ゆえ本自体もかなり傷んでおりコピーは許可されなかったが、スキャナーでデータを保存し持ち帰ることができた。またこのパヴェーゼ訳と比較するため、別の翻訳者による 1954 年のイタリア語訳も閲覧・複写した。さらに、古書店にも立ち寄りパヴェーゼによるスタインベックの『二十日鼠と人間（Of Mice and Men）』のイタリア語訳を入手した。

続いてミラノから鉄道で三時間ほどの距離にあるサント・ステファノ・ベルボという村に移動した。ピエモンテ州トリノの南に位置するこの村はパヴェーゼの出身地である。パヴェーゼは 1908 年にこの村で生まれ、トリノで育った。パヴェーゼは幼い頃から頻繁にこの村を訪れここで休暇を過ごした。パヴェーゼが生まれた家は現在も博物館として残されており、ここにはパヴェーゼについて書かれた多くの論文が保管されている。今回の調査旅行では館長との相談の上、数多くの論文のなかで私の研究テーマ（パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学の影響）に特に関係するものを閲覧・複写した。さらにこの博物館によって発行されている論文集も入手した。また、空いた時間には館長の案内で村の中に残るパヴェーゼゆかりの場所を訪れた。この村には、パヴェーゼの生家や墓などだけではなく、パヴェーゼの作品、特に『月とかがり火 La luna e i falò』の登場人物のモデルとなった人物が住んでいた家などが今も残っている。

その後トリノへと移動しトリノ大学の図書館を訪れた。トリノ大学には、パヴェーゼとゴッツァーノという二人のトリノの作家に関する資料を多く保管する研究所がある。残念ながら責任者と連絡がつかず研究所の中に入ることはできなかったが、ここで開かれた研究報告会の論文集をトリノ大学の図書館で閲覧することができた。さらに、『Esperienze letterarie』という雑誌のパヴェーゼ特集号を閲覧することもできた。

最後にトリノからヴェネチアへと移動し、クエリーニ・スタンパリア図書館へ行った。ここではシャーウッド・アンダーソンの『黒い笑い（Dark Laughter）』やジョン・ドス・パソスの『北緯四十二度線（The 42nd Parallel）』のパヴェーゼによるイタリア語訳を閲覧した。また、書店にも赴きガートルード・スタインの『アリス・B・トクラスの自伝（The Autobiography of Alice B. Toklas）』やフォークナーの『村（The Hamlet）』などについてパヴェーゼのイタリア語訳を入手した。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

今回の学術調査では、主にパヴェーゼの翻訳作品、そしてパヴェーゼに関する学術論文を集めることができた。このうちパヴェーゼの翻訳作品については、原語や他のイタリア語訳などとの綿密な比較を行っているが、非常に時間のかかる作業であるため、すぐに分析結果や考察を引き出すことが困難である。そのためここでは、パヴェーゼに関する論文を中心的に取り上げながら学術調査の結果を報告する。

今回の学術調査で閲覧・収集した論文について報告する前に、まずは私の研究テーマについて簡単に説明をしておきたい。私は現在パヴェーゼとアメリカ文学との関係について研究している。20 世紀前半のイタリアの作家チェーザレ・パヴェーゼは、まだアメリカ文学が一般に広くは知られていなかった 1930 年代初めから数多くのアメリカの小説を翻訳した。パヴェーゼが訳したアメリカの小説家として具体的には、シンクレア・ルイス、メルヴィル、スタインベック、ガートルード・スタイン、ジョン・ドス・パソス、シャーウッド・アンダーソンなどの名が挙げられる。パヴェーゼは多くの批評も発表し、それ以前の文学者とは全く異なる立場、すなわち「アメリカ文学から学ぶ」という立場でアメリカ文学を紹介した。実際、パヴェーゼの翻訳・批評活動と創作活動には密接なつながりがあり、パヴェーゼ自身の小説にもアメリカ文学の影響が見られる。

こうしたパヴェーゼとアメリカ文学との関係について考察するためには、当時の文化状況、特に「アメリカ神話」と呼ばれる現象に対する理解が不可欠である。1920 年代後半から 1940 年代にかけてイタリアでは、多くの若い左翼知識人がアメリカ文学に傾倒した。彼らがアメリカ文学に向かったのは、ヨーロッパの文学的伝統と異なる文体やテーマの新鮮さに惹かれたためだけではない。当時アメリカは彼らにとって「反ファシズム」「民主主義」「自由」といった概念の象徴であった。彼らは「旧いヨーロッパ」に対する「新しいアメリカ」を理想化し、ユートピアとしてのアメリカを自らの拠り所としたのである。このアメリカ神話と呼ばれる現象においてパヴェーゼはエリオ・ヴィットリーニと共に中心的な存在であった。

彼らのアメリカへの期待や憧れは、第二次世界大戦が終わると急速に薄れていく。戦後若者の間では物質的に豊かなアメリカに対する憧れが高まり、この現象もまた「アメリカ神話」と呼ばれるが、それは 1920 年代後半から 1940 年代の左翼知識人たちの「アメリカ神話」とは全く別のものであった。彼らの「アメリカ神話」が衰退した最大の原因は政治

的な変化だった。第二次世界大戦後イタリアの左翼知識人にとってアメリカは「自由と民主主義の国」ではなく「ソ連と対立する資本主義国」として表れてきたのである。ファシズム政権がすでに崩壊している以上アメリカはもはや反ファシズムの象徴でもなかった。

こうしてアメリカ神話そのものは戦後衰退していったのだが、アメリカ文学の影響のもとに新しい文体やテーマを取り込んだパヴェーゼやヴィットリーニの作品は、戦後のイタリア文学に大きな影響を与えた。その意味で、パヴェーゼとアメリカ文学との関係について研究することは、戦後のイタリア文学についての理解を深める上でも非常に重要である。

パヴェーゼのアメリカ文学への関心には、様々な要素が複雑に混在する。とりわけ、パヴェーゼのアメリカ神話に、左翼知識人的な「民衆」に対する意識と共に「モダニティー」に対する意識が強くあったことは興味深い。パヴェーゼはアメリカの文学だけではなく映画や音楽へも強い関心を抱いていた。また、パヴェーゼはアメリカ神話が衰退する前からアメリカに対して矛盾した感情を抱いていたとも言われる。こうした複雑な側面に光を当てながら、パヴェーゼとアメリカ文学との関係を論じることが私の研究の目的である。

パヴェーゼとアメリカ文学の関係については、これまでにも多くの批評家が論じてきた。ただし、その多くは短い学術論文や批評であり、このテーマについて一冊全体を通して論じた研究書は少ない。従って、先行研究についての調査は何冊かの研究書と短い学術論文・批評を中心にこれまで行ってきた。しかし、今回の学術調査で訪れたサント・ステファノ・ベルボのパヴェーゼ博物館では、このテーマについてイタリアの大学で書かれた卒業論文がいくつもあることが分かった。この博物館はパヴェーゼについて書かれた優れた論文に賞を与えているため、多くの卒業論文が毎年ここへ送られてくる。そのなかからパヴェーゼとアメリカ文学との関係をテーマにした論文を六つ見つけることができた。もちろん卒業論文に研究書と同じレベルの内容を期待することはできないが、賞への応募作ということもありその多くはレベルが高く、これから研究を進める上で参考になると思われる。また、これらの論文を通してイタリアの大学において現在パヴェーゼとアメリカ文学についてどのような学術的関心が持たれているのかを見ることもできるだろう。そこでこの学術調査報告書では、今回パヴェーゼ博物館で閲覧したいくつかの論文について概説・分析し、そこから引き出せる興味深い観点や今後の研究課題を報告する。

まずは、1990－1991 年度ボローニャ大学に提出されたラファエレ・サッケッティの論文『アメリカ神話とアメリカにおけるパヴェーゼ批評（Il mito Americano e la ricezione

critica di Pavese negli Stati Uniti)』について述べる。この論文は、三部構成をとっており、第一部はアメリカ神話についての概説、第二部はアメリカにおけるパヴェーゼ批評の分析、第三部はアメリカに住むパヴェーゼ作品の翻訳者や批評家へのインタビューとなっている。

この論文の優れた点は、アメリカにおけるパヴェーゼ作品の批評をひとつひとつ丁寧に確認しながら、パヴェーゼの作品がアメリカでどのように受容されてきたかを 50 年代から 90 年まで時代別にまとめているところだろう。パヴェーゼはアメリカの一般読者にとって知名度の高い作家ではないが、アメリカのイタリア文学者たちはパヴェーゼについて多くの批評を書いている。当然のことながら、彼らが最も強い関心を抱いたのはパヴェーゼとアメリカとの関係についてだった。パヴェーゼとアメリカ文学との関係というテーマは、イタリアよりもむしろアメリカで熱心に取り上げられてきたことがこの論文からは分かる。

ここで言及されていた先行研究のなかで特に興味深かったのは、アメリカにおけるパヴェーゼ批評についてクリスティーナ・バッキレーガが書いた論文である。バッキレーガによれば、50 年代に初めてアメリカでパヴェーゼが紹介されたとき、パヴェーゼは「アメリカ文学の紹介者」という点では受け入れられやすい作家だったものの、「共産党員」という点では受け入れられにくい作家だったという。こうした背景もあり、パヴェーゼとアメリカ文学との関係が論じられる際は、肯定的なアメリカ像に焦点が当てられ、晩年のアメリカ神話の衰退には当初あまり触れられなかったという。

また、1952 年にはイギリスで『月とかがり火』の英訳が出版されたが、この英訳のアメリカでの評判は非常に悪く、「アンダーソンやスタインベックのパスティーシュ」のようだと言われた。こうした翻訳の問題もあり、当初パヴェーゼはアメリカ文学を模倣したつまらない地方主義作家と捉えられた。そしてその後パヴェーゼの評価が回復してからも、パヴェーゼは実際以上にアメリカ的な作家として位置づけられたという。これからアメリカでの先行研究を参考にする際には、こうした批評の背景もふまえておく必要があるだろう。

サッケッティの論文でもうひとつ興味深いのは、『月とかがり火』で描かれるアメリカをアメリカのイタリア文学者がどのように見ているか紹介した部分である。パヴェーゼの最後の小説『月とかがり火』は、若い頃アメリカに移住した男が長い年月を経て第二次世界大戦後イタリアの故郷の村に帰ってくる物語である。物語の中心は、帰郷した主人公が目

にする現在の故郷の様子や主人公が回想する昔の故郷での生活だが、一部分アメリカでの生活が回想される箇所もある。イタリアでは一般的にこの『月とかがり火』で描かれるアメリカは現実のアメリカではなくパヴェーゼのアメリカへの失望感を表したものとして捉えられている。この論文がまとめたところによれば、アメリカのイタリア文学者の多くも、『月とかがり火』におけるアメリカの描写は抽象的で非現実的だという評価で一致している。しかし、なかにはそれとは反対の見解を示す研究者もいることがこの論文では指摘されている。

ドナルド・ハイニーは 1985 年に発表した批評のなかで、『月とかがり火』におけるアメリカの描写はパヴェーゼの故郷であるランゲの描写よりもリアリスティックだと述べている。ハイニーのこのような主張が正しいかは疑問だが、従来とは全く異なるアメリカ人の見解という点では非常に興味深い。今後このハイネーの書いたものを手に入れ、その特異な主張の具体的根拠を確認する予定である。いずれにせよ、パヴェーゼとアメリカとの関係について新たな研究を進めていくためには、『月とかがり火』に登場するアメリカについて「アメリカ神話の衰退とパヴェーゼの失望感」という従来の見解以上のことが言えないか、再検討する必要がある。

この論文の第三部についても少し触れておきたい。論文の著者サッケッティは、アメリカに住む四人のイタリア文学者に対してインタビューを行った。具体的には、イタリアからアメリカに移住したイタリア文学者ジャンパオロ・ビアシン、パヴェーゼの数多くの作品（『浜辺』『丘の上の家』『女だけの間で』『丘の上の家』『月とかがり火』など）を英訳したロバート・フリント、ハンガリーからアメリカに移住したイタリア文学者ティボル・ヴラッシチ、そしてパヴェーゼの詩集『働きつかれて』や『レウコーとの対話』を英訳したウィリアム・アロースミス、この四人に対してインタビューは行われた。なかでも特に興味深かったのは、ヴラッシチのインタビューである。

ヴラッシチはインタビューの中で、パヴェーゼやヴィットリーニのアメリカ像がわずかな情報のもとに作られた間違ったアメリカ像であることを指摘した上で、パヴェーゼは実際のアメリカが自らの期待と異なることを心のどこかで分かっていたと示唆している。

たしかにパヴェーゼの批評や手紙などを読むと、アメリカ神話の高まっていった 30 年代からすでにアメリカの否定的な側面にも気付いていたのではないかと思わせるところがある。パヴェーゼとヴィットリーニのアメリカ文学とのかかわりを注意深く比較してみると、

この二人は関心の持ちようも時期もかなり異なっている。「パヴェーゼやヴィットリーニのアメリカ神話は 1930 年代に高まり 40 年代ごろ頂点を向かえ戦後急速に衰退した」、というのが従来の一般的な見解だが、そう単純にはまとめられないのではないだろうか。同時代の他の作家との共通点・相違点に留意しながら、パヴェーゼのアメリカに対する複雑な関心のありように光をあてることがこれからの研究には必要である。

次に、2006－2007 年度にトリノ大学で提出されたフランチェスカ・ガッティの論文『チェーザレ・パヴェーゼとアメリカ―パヴェーゼの作品におけるアメリカの小説家の影響－Cesare Pavese e l'America. Gli influssi dei romanzieri americani sull'opera pavesiana』について報告する。この論文は五部構成となっている。まず、第一部は、イタリアにおけるアメリカ文学の受容の歴史や、パヴェーゼとアメリカ文学との関わりをまとめている。そして第二部は、口語や方言の観点から、第三部で視点やテーマの観点から、それぞれパヴェーゼ作品におけるアメリカ文学の影響を論じている。さらに、第四部・第五部ではそれぞれ『故郷（Paesi tuoi)』と『月とかがり火』というパヴェーゼの二つの作品について、より具体的なアメリカ文学からの影響を論じている。私が博士論文で計画していたものと非常に近いテーマ・構成の論文であったため、多くの示唆を得ることができた。

この論文が優れているのは、パヴェーゼのアメリカ文学への関心を単純化せずに論じているところである。パヴェーゼとアメリカ文学との関係について書かれた論文のなかには、複数のアメリカの小説家に対するパヴェーゼの関心をひとまとめに説明したり、パヴェーゼのアメリカ文学に対する関心の変遷を「戦前のアメリカに対する期待／戦後のアメリカに対する失望」と単純に二分して説明したりするものが多い。それに比べ、このガッティの論文では、複数のアメリカの小説家に対するパヴェーゼの評価の違いや、パヴェーゼの関心の変遷を丁寧に論じているのである。

例えば第一部では、フォークナーに対するパヴェーゼの評価が時と共に変化したことに注目している。パヴェーゼは 1934 年フォークナーの『サンクチュアリ』について厳しい批評を書き、フォークナーの作品における語り手の特殊性を説明した上で、フォークナーを「魂を救済しない天使である」と批判した。しかし、その後フォークナーに対するパヴェーゼの評価は部分的に変化し、1941 年にはフォークナーの『村』を翻訳している。

またこの論文は、パヴェーゼの翻訳活動の動機が常に同じではなかったことを指摘している。1930～40 年代にパヴェーゼが様々アメリカの小説を翻訳したのは、アメリカ神話の

もとでアメリカ文学に大きな期待を抱いていたからだと通常言われる。しかし、実際パヴェーゼの翻訳活動には収入を得るためという経済的な動機もあり、いくつかの作品に関しては経済的動機の方が勝っていたという。このことから、パヴェーゼの翻訳した作品とパヴェーゼが強い関心を抱いた作品というのは必ずしも完全に一致しているわけではないということが言える。こうした複数の作品についての翻訳の経緯や動機の違いは、今後パヴェーゼの翻訳活動と創作活動とのつながりを論じる上で注意すべきことだろう。

パヴェーゼの作品といくつかのアメリカの小説を具体的に比較した第三部・第四部にもいくつか興味深い指摘を見つけることができた。まず第三部では、パヴェーゼの作品『故郷』がジェームス・ケイン、スタインベック、ヘミングウェー、フォークナーという四人の作家の小説と比較されている。『故郷』をケインやスタインベックの作品と比較・分析した論文は他にもあるが、概して共通点を指摘するだけで終わりがちである。この論文が優れているのは、これらの作家の小説と『故郷』を比較・分析する際に、共通点だけでなく相違点にも注目していることである。

例えばこの論文は、パヴェーゼの『故郷』とケインの『郵便配達はいつも二度ベルを鳴らす（The Postman Always Rings Twice）』を比較し、性と暴力というテーマや、口語的・省略的な文体などの共通点と共に、二つの作品の相違点をいくつか挙げている。なかでも特に重要と思われる指摘は、それぞれの作品における一人称の語り手についての指摘である。論文の筆者ガッティによれば、『故郷』の主人公ベルトの内的独白は『郵便配達はいつも二度ベルを鳴らす』の主人公フランクの告白とよく似ているが、ベルトの語りは出来事というよりも彼自身の思考を表しているという点で、フランクの告白とは異なっている。その意味で、パヴェーゼはケインの影響を強く受けてはいるが、その手法はケインよりも一歩先に進んだものなのだという。この指摘は私の考えとも一致する。

もう一つこの論文によるケインとパヴェーゼの比較・分析のなかで重要な指摘は、モダニティーにかかわるものである。論文の筆者ガッティは、パヴェーゼがケインから口語的・省略的な文体を学んだことを説明した上で、「パヴェーゼが短い章立てや省略的な書き方を好んだのは、自然主義から抜け出して、同時代、つまりは速度を増すモダニティーと共にあるためだった」と述べている。これは私の考えと一致する重要な指摘だが、ここでは簡単に触れられているだけで深くは論じられていない。今後研究を進めていくにあたっては、このような指摘を出発点に、パヴェーゼとモダニティーの関係について考察をより

深めていく必要があるだろう。

一方第四部では、パヴェーゼの最後の小説『月とかがり火』とシャーウッド・アンダーソンやメルヴィル、そしていくつかのアメリカ映画との関係が論じられている。なかでもとりわけ興味深かったのは、アメリカ映画についての記述である。

パヴェーゼはアメリカ文学だけではなく、アメリカ映画のファンでもあった。論文の記述によれば、2007 年にトリノで催されたパヴェーゼに関する展示会（「パヴェーゼと彼のトリノ」）には、パヴェーゼと映画というテーマにあてられた一室があり、フィルム・ノワールやウェスタン映画が『月とかがり火』にインスピレーションを与えたと説明されていたそうである。具体的には、ジョージ・キューカーの『The Women』(1939)、ウィリアム・ワイラーの『デッド・エンド』(1937)、ジョン・フォードの『三人の名付け親』(1938)などの作品の名が挙げられている。ガッティの論文は、『月とかがり火』とアメリカ映画との関係を簡単に紹介するだけで、深くは論じていない。パヴェーゼとアメリカ映画の関係についてさらなる研究を進めていくことは今後の重要な課題である。

最後に 2002 年シカゴ大学で提出されたマリア・ウォルフォードデルの博士論文『パヴェーゼと批評（1941－2000）Pavese e la critica(1941-2000)』について簡単に報告する。これは、パヴェーゼに関する批評を 1941 年から 2000 年まで時代ごとに分けて概説・分析した優れた論文である。この論文がまとめたところによれば、パヴェーゼに関する批評は大きく三つの傾向に分けられるという。一つ目は、アメリカニズムの問題を扱う批評、二つ目は、社会的責務（impegno）とリアリズムの問題を扱う批評、そして三つ目は、宗教や神話の問題を扱う批評である。一つ目のアメリカニズムの問題とは具体的にはアメリカ文学の影響やそれに関わるイタリアの言語問題やリアリズムの問題である。現在イタリアではほとんど関心を持たれていないが、アメリカあるいはイギリス・アイルランドなどの英語圏ではこの問題について今も研究が行われているという。

この博士論文の筆者ウォルフォードデルは最後に、これまでの批評の歴史をふまえた上で今後パヴェーゼに関して研究されるべきテーマをいくつか提示している。そのなかの一つにパヴェーゼのアメリカニズムも入っており、これは今後再びイタリアで研究されるべきテーマだと述べられている。具体的には、フィッツジェラルドやケイン、フォークナー、スタインなどの作家がパヴェーゼに与えた影響が研究されるべきだという。

こうした提案も参考にしつつ、今後はまず私が現在特に関心を抱いているフォークナーのパヴェーゼへの影響について研究を進める予定である。また、こうしたアメリカニズムの問題と先に挙げた責務の問題や宗教の問題との関連付けを探ることも今後の大きな課題である。

(5) 調査地・文書館建物などの写真データ(二枚程度)貼り付け

パヴェーゼ生家博物館外観

パヴェーゼ生家博物館 2 階

葡萄畑の焚き火（falò）